

李宗仁の抗戦思想と台児荘の大勝

(山東師範大学青島分校教授・副校長) 陳 崇鈺
 (山東師範大学青島分校教授) 尹 鉄錚
 (青島服装研究所服装学校講師) 陳 垣
 (開成学園) 三好 章 訳・解題

(解題)

この「李宗仁の抗戦思想と台児荘の大勝」は、1995年8月、北京で開催された「紀念中国抗日戦争勝利50周年国際学術討論会」に提出された論文の一つである。シンポジウムの概要は本号掲載の参加記をご覧頂くとして、この論文のもつ意味をここで簡単に述べておきたい。

従来、抗日戦争期は、国民党に取って代わる勢力として、中国共産党が全国人民の支持を獲得した時期であったとされ、この時期に関する中国国内の研究もまた、それを各方面から実証しようとするものが多かった。とくに、人民公社が中国社会主义の特徴とされていた時期にあっては、抗日戦争期の減租減息や労働互助運動が、後の社会主义を予告するものとして賞揚されていた。しかし、現在の政治社会情勢、すなわち「改革・開放」が叫ばれるようになると、抗日戦争研究においても新たな動向が生まれてきた。その一つがこの陳崇鈺氏らの論文に代表される、「正面戦場」と国民党関係者の再評価である。共産党が戦った戦場を「敵後方」と称し、国民党の場合を「正面戦場」と読んでいたことは当時からであるが、李宗仁とその抗戦思想が取り上げられている本論文全編を通じて、背後に見えるのは、毛沢東の『持久戦論』

である。日中両国の多方面にわたる比較、主観能动性論をおもわせる「主体的努力」の強調、愛国心の強調など、李宗仁が書いた『持久戦論』とでもいうべき内容である。抗日戦争全体を抵抗する側から冷静に考えれば、こうしたやり方以外に勝つ方法がなかったということかもしれない。しかし、それが現在、中国の研究者によって漸く認識され、例示されたという意味は大きいのではないだろうか。

論文の中心的執筆者である陳崇鈺氏は1926年生まれ、1952年山東大学歴史系卒業後、1956年上海の華東師範大学中国現代史専業に入学し、1959年卒業。最近のものでは「論左宗棠功大于過」(『青島大学学报』1990年第1期)、「論康有為的宗教観」(『東岳論叢』1992年第1期)などの清末の思想史研究に関する論文もあり、抗日期に関しても「論抗日戦争初期国民党正面戦場的幾個問題」(『抗日戦争史論文集』北京春秋出版社 1991年)などがある。さらに、『中国新民主主義時期通史』全4巻(人民出版社 1982年)の執筆にも加わっている。また、尹鉄錚氏は1952年山東大学歴史系卒業の陳崇鈺氏と同年輩、陳垣氏は1990年青島大学師範学院歴史系卒業後、1993年北京大學经济管理系卒業の若手研究者である。

はじめに

抗日戦争期、1938年3月23日から4月7日の間に展開された台児荘戦役は、中国軍第五戦区司令官李宗仁が自ら指揮し、山東省南部で日本侵略軍に抵抗した大規模な民族自衛戦であり、16日間に敵1万以上を殲滅した大勝利であった。本論

文は、李宗仁の抗戦思想と台児荘戦役におけるその具体的な活用を全体的に明らかにし、それが台児荘での大勝に決定的な役割を果たした事に関する試論である。これらは、これまであまり論じられたことがなく、あったとしても詳細なものではなかった。

1. 李宗仁の抗戦思想

李宗仁の抗戦思想は、彼自身の総括によれば「焦土抗戦論」である。これが提起された時期については、1933年説がある⁽¹⁾。『辞海』1981年版は抗日戦争期に提起されたとしている。しかし、我々は1936年4月17日、李宗仁が広州で新聞記者を接見した時、「我が主張一焦土抗戦」と題する演説を行い、「中日問題」について最初に全面的に自分の考えと主張とを鮮明にした時がそれであったと考える。これ以降、李宗仁は何度も文章や談話を発表し、「焦土抗戦論」について議論を深めた。それでは、なぜ李宗仁はその抗戦思想を「焦土抗戦」としたのであろうか。もちろん、文字どおりに全国を焦土と化す事をいとわないということではない。中華民族を滅亡の危機から救うため、「必ずや全民族の解放戦争を発動せねばならず、もとより全国を焦土と化す不屈の決意を持たずに、どうして大鉈を振るって侵略者に対せられようか」⁽²⁾というのである。李宗仁は抗戦の決意を強調するため、その主張を「焦土抗戦」としたのであり、「本当に持てるもの一切を自ら焼き尽く」せと言ったのではない⁽³⁾。李宗仁が抗戦期に指揮した戦区では、町や村を焼き払ったことなどなかったことから、十分に説明がつこう。

【李宗仁の抗戦思想の主要内容】

(1) 日本の休むことのない侵略を前に、「抗戦すればすなわち存し、屈服すればすなわち亡ぶ」

“九一八事変”以後、日本が狂ったように中国を侵略した事実から、また1934年の日本外務省の天羽声明^(訳注1)から、李宗仁は「その侵略の目標はもとより全中国である」⁽⁴⁾とし、蒋介石国民党が進める「安内攘外」の反動政策と、日本の侵略に対する妥協と譲歩の「不抵抗主義」に対し道理正しく厳正なる言葉で批判と反駁を加えた。それは、不抵抗政策によって「民族の災難が日増し

に深くかつ重大になり、国家の命運を累卵の危きに導いて」いるからであり、もし「安内攘外」の道理に悖る政策を変えずに、「安内してのみ攘外有り、統一してのみ抗日有り」との方針を進め、頑なに「我々の土地の権利ということで日本に対すとは、全く薪を抱えて火を消そうとするようなものだ。薪は燃えつきるまで燃えつづけるもの」ということでは、「こうした日本人の侵略の欲望を、果たして満足させられると言うのか。」「日本軍閥の中国に対する飽くなき進攻を引き出すことではないのか。」⁽⁵⁾中華民族が生きるか死ぬかの瀬戸際にある今、鍵は「中国自身が抗戦できるか否か」にあり、「抗戦すればすなわち存し、屈伏すればすなわち亡ぶ、断固たる抗戦以外、逡巡する余地はない。」「ただ徹底的に『不抵抗主義』を放棄し、直ちに対日作戦を行うことこそ、中華民族の現在唯一の前途」⁽⁶⁾なのである。

(2) 抗日戦争は必ず「侵略への自力抵抗」によるべきである

李宗仁は、抗戦では自力更生の方針を堅持せねばならないと提起して、国民党実権者の「他人任せの日和見主義」の思想に反駁した。「外部の力に頼れば、日本人の進攻を食い止められるのであり、故に国際連盟を頼ることが唯一の政策で」、後には「国際戦争が起こる時を待って、さらに機を見て失地を回復する」との「この種の日和見的な考えは、完全に幻想である」⁽⁷⁾と述べた。李宗仁將軍の主張では、国民党政府の国際連盟依存を唯一とする政策はすでに破産し去っていた。国際戦争勃発の見通しについては、「国際戦争勃発の可能性はあるが、いつ起きるかは決められるものではない」し、「日本の当面の目的は、ひたすら中国を侵略し併呑することであり、まだ列強に対して戦争を発動する必要性はな」⁽⁸⁾い。イギリス・アメリカ・ソ連と日本との間には確かに矛盾があるが、アメリカは極東問題では「沈黙政策を

採り、日本との経済関係は中国より密接」であり、イギリスはドイツ＝ファシズムの勃興によって「ヨーロッパでの地位に日ごとに困難を感じ」、「日本に関することはできず」、ソ連は現在ひたすら「平和外交、国防強化を進めて、社会主義建設の保障としている」⁽⁹⁾。「自力で侵略に抵抗せずに、座して国際環境の好転を待つだけであれば、世界戦争が勃発する前に、中国は水の涸れた轍で助けを求める鮒になってしまうであろう」⁽¹⁰⁾。我々は必ず「我等四億の民の力、我等が堅忍不拔の勇気を自ら信じねばならず、自信喪失と日和見の存在を毫も許してはならない」⁽¹¹⁾のである。

(3) 抗日戦争は当然「全国動員を実行し」、全民抗戦を進めねばならない。

なぜ抗日戦争は必ず全民抗戦でなければならないのか。李宗仁は次の様に指摘している。日本が発動した侵略戦争は全中国を滅ぼそうとするものであり、中国の抗戦は中华民族の生死存亡に関する戦争であるから、「現在の抗戦は全民族の戦争であり、国民全てに関する戦争である」⁽¹²⁾。少数のみによる抗戦では対応できず、「全面戦」を進めねばならないのである。「全面戦」の要点は次の4つ。1.局地戦ではなく、全線抗戦。2.軍隊のみの抗戦ではなく、全民抗戦。3.軍事面のみの抗戦ではなく、軍事・政治・経済・文化がそれぞれ結合した全体抗戦。4.一党一派の抗戦ではなく、抗日的党派と抗日的友軍および民衆のあらゆる勢力が連合した挙国抗戦。さらに、「労働者・農民・学生・商人・自由業者を全て動員、組織して、金あるものは金を、力あるものは力を出し」、「民衆組織を強化して全国動員を実行し、我国4億が全て立ち上がり、日本侵略者に抵抗、防禦すること、このような新たな長城だけがいかなる残虐狂暴、凶悪な敵をも、打ち破れる」⁽¹³⁾のである。

(4) 抗日戦争を進めるには、必ず「長期禦侮、

持久抗戦」すべきである

李宗仁は中日双方の各種要因を比較して結論を出した。日本の対中国戦争は侵略的性質の戦争であるが、それは強国であっても本来脆弱な物的基盤の上に成り立っている。日本の国土は小さく、資源も少なく、人的物的力量共に乏しく、長期の戦争には耐えられない⁽¹⁴⁾。それゆえ、速戦速決が有利である。中国は祖国防衛の戦いであるが、弱国であり、「速戦速決」は不可能であるが、「人的物的力量はもちろん、自然条件・社会的基礎もみな、消耗戦持久戦にふさわしい」⁽¹⁵⁾。まさしく、敵を「過大な消耗にも全く補充はなく、もちろん政治的経済的、さらに国際関係の上での危機が、必ずいつせいに爆発し、非常に苦しく困難な状態に陥り、結局、中国に対する軍事行動は、全て潰えさるであろう」⁽¹⁶⁾。このため、李宗仁は断固として中国の持久抗戦・消耗抗戦・遊撃抗戦を主張し、これを「中国が戦略上日本より有利に事を運べる3つの点」と呼んだのである。

(5) 抗日戦争の戦役・戦術・作戦原則

李宗仁は抗日戦争中の中日双方の用兵の得失を論じた際、「盧溝橋事変」以後、「大規模な用兵が必要な時でも、日本は全国の師団を投入して侵犯しようとし、華北・華東においてのみ少数の兵力で中国と作戦し、兵力不足になって、やっと逐次増派し、戦争に深入りしたが、こうした『兵力を小出しにするやり方』は、兵法家の大いに忌むところを犯した」⁽¹⁷⁾と考え、兵力を集中し、敵の各個殲滅を主張した。さらに、一貫して敵への進攻作戦を強調し、戦略的防禦の時期には攻撃によって防衛し、戦略的進攻の時には、更に断固として進攻し、冒険的な進攻さえも主張した。作戦時には機動的に作戦し、よく運動戦を行い、柔軟な作戦指揮を実践することなどを主張した。

(6) 抗戦の前途の最終的勝利は我国のもの

中国の抗日戦争が必然的に勝利を得るとの結論を、李宗仁は中日双方の軍事、経済、政治および国際関係の各方面の分析をもとに引き出した。

軍事面では、「中国の軍備は日本より劣ってはいるが、戦争の勝敗は純粹に軍備によってのみ決まるのではない」。兵力について言えば、「日本の常備兵力は20万余にすぎず、戦時でも動員できるのは400万以下であるが、中国の常備兵力は、民団を合わせれば400万を下らず、戦時では少くとも5000万は動員できる」⁽¹⁸⁾し、加えて中国は広く、交通が不便であることも、日本の速戦速決には不利である。

経済面では、日本は資本主義強国ではあるが、「最近の経済危機はますます重症であり、財政赤字も8億円以上に達し、国債も増大して100億円を突破した。しかし、それは大衆生活の困難を救うのではなく、軍需工業に景気が偏在している。世界市場では日本製品が締め出され、燃料・糧秣・被服などの軍需物資の原料が欠乏し、危機を露呈し」、戦争が続けば、「やがて経済大恐慌がおこり、政治闘争がより激化することは必定である」。我国の経済は立ち遅れてはいるが、人口が多く、多くが農民である。日本軍が沿海の都市を侵略占領しても、「我民族全体の生命線を断ち切りきれず、農民が畑仕事をして、自給自足に力め」⁽¹⁹⁾て、引き続き戦争を支え得る。

政治面では、日本が引き起こした侵略戦争は、けして人心を得られず、多くの政治勢力が衝突する展開では、必然的に「日本の政局を極度の不安定」状態に陥らせるであろう。中国がひとたび抗戦に奮い立てば、侵略者に重大な打撃を与え、日本に必然的に革命を爆発させるであろう。中国の日本との戦争は、「被圧迫民族の自衛戦争」の性格を持ち、生死存亡の闘争の中で、「中国各方面の勢力が必ず固く団結し、民族救亡の連合戦線もまた必ず迅速に発展し」⁽²⁰⁾、ともに奮闘し、戦うほどに必ず強くなるであろう。

国際関係の面では、日本の侵略が拡大するにつれ、「英米露との衝突が日増しに激化し」、もし我国が抗戦に奮起すると同時に国際関係を正確に処理すれば、まさしく国際的に「有効な援助」⁽²¹⁾を得られるであろう。

李宗仁将軍はまた、我国が奮起して抗戦し、戦争を維持できさえすれば、「日本軍の物質的な長所は絶対に発揮することができず、我々の弱点が、かえって勝利に資するであろう」⁽²²⁾と指摘している。そして、さらに抗戦勝利を勝ち取るための客観条件3か条として、まず最も重要な「民族の自覚と民族内部の団結」、次に「最低限度の自衛力の具備」、第3に「国際的に強大な支援の獲得」をあげた。これらの条件を中国が「本当に備え」、我々が「主体的な努力を強め」さえすれば、必ず「徹底的な勝利を勝ち取ること」ができるとしたのである。⁽²³⁾

李宗仁は「抗日3日亡国論」を厳しく論駁した際、中国の抗戦勝利は「世界の民族解放の歴史の必然的な結果」であり、「中国国民革命の進展の必然的な結果」⁽²⁴⁾であると繰り返し強調し、明言した。抗戦に「一つの必敗の理由もなく、かつ最終的勝利は必然的に我国に帰する」⁽²⁵⁾のである。これは全国の軍民の闘志を鼓舞し、必勝の信念を固めるうえで、重要な役割を果たしたのである。

2. 台兒莊戦役における李宗仁抗戦思想の具体的活用

日本軍は上海・南京占領後、軍事的に迅速に中国を征服しようと企図し、南北の戦場を結合しようとした。台兒莊戦役の前、日本軍は津浦線沿いに南北から進み、二方面で大攻勢をしかけ、戦略の要の徐州を攻撃した。第五戦区は腹背に敵を受け、防衛地区は南北に深く200km以上、形勢は危険極まりなかった。しかし、中国軍は受動的な軍事態勢で勝利は困難と見えたのに、内外に衝撃を与えた台兒莊の大勝利をあげたのである。勝利

の要因は、主要には李宗仁將軍の抗戰思想とそこから導かれた正確な戰略戰術が、我軍を台兒莊地区で受動的態勢から主動的態勢に転じさせ、危機から脱出させた点にある、と考えられる。

李宗仁は「長期禦侮、持久抗戰」の抗日戰略から出発し、その原則に基づき、国民党正面戦場で実行されていた消極的防禦の戰略戰術を改め、積極的防禦の戰略戰術を採った。また、それまでの敵との消耗をひたすら競う陣地戦を改め、陣地戦、運動戦、遊撃戦を有機的に結合した。そして、敵の正面で、兵を分散して抵抗防禦し、敵に引き回されて攻撃され、ずるずる敗退していたそれまでの愚かな作戦を改め、有利な地区を選び、敵を深く誘いこみ、優勢な兵力を集中し、臨機に反包围を行い、敵軍の連携と退路を絶ち、迅速に殲滅する機動的で柔軟な作戦を採った。自ら主動的に敵を殲滅することで、敵に壊滅的な打撃を与え、「長期禦侮、持久抗戰」の目的をとげたのである。

1937年12月、南側からの日本軍第13師団約8万が長江を渡河し、滁県を占領した後ひきつづき北へ侵犯し、我第31軍は合肥・定遠を守備していた。1938年2月上旬、日本軍は定遠・鳳陽・蚌埠などの地を攻略し、徐州に迫った。李宗仁はまず第51軍などの部隊を移動させて敵の進撃を防ぎ、正規部隊と遊撃隊が正面での防備と側面背面での出撃とで呼応する戦術を採り、敵を淮河一帯で阻止し、それ以上の北進を食い止め、中日両軍が淮河をはさんで対峙する局面を形成した。北からの日本軍は2方面から進攻、左翼の板垣第5師団は、1938年1月中旬、青島上陸後、膠済線に沿って西進し、濰坊を経て南に転じ、山東省南部の重鎮臨沂を直撃した。右翼は磯谷第10師団で、津浦線をはさんで南下、両方面の敵軍は台兒莊で合流し、側面から徐州を包囲し、南側からの敵の友軍の進攻に呼応する作戦であった。2月下旬、日本軍は臨沂に猛攻を加え、守備軍の龐炳勛第40軍は陣地を死守したが、かなりの死傷者を出した。李宗

仁將軍は急ぎ張自忠第59軍を臨沂の増援に送り、龐・張共同で反撃、血戦一週間、敵3000以上を殲滅、敵の侵攻を挫き、北側からの日本軍2方面の合流を阻んだため、右翼磯谷師団の一部が滕県を猛攻、四川軍 112師団3000余は必死に奮戦したが、血戦3日、師団長王銘章と多くの将兵全てが国に殉じた。磯谷師団は滕県占領後、台兒莊に直接攻撃を仕掛けた。

台兒莊は敵を殲滅するのに有利な地域であった。ここを確保するため、李宗仁は孫連仲第2集團軍の3箇師団を大運河沿いに防衛に当たらせ、台兒莊の正面陣地を扼守した。同時に、湯恩伯第20軍団の2個軍を津浦線の正面に展開させ、台兒莊東北の抱犢山区で待ち伏せた。敵の側面に転じて深く誘い込み、敵主力が台兒莊に引き込まれるのを待って内外から突撃し、包囲殲滅したのである。そして、孫桐萱第3集團軍^(訳注3)に迅速に津浦線を襲撃させ、敵後方の補給線を切断した。3月23日、敵は優秀な武器と砲火の援護の下、戦車を先導に台兒莊に向けて8回の猛攻を仕掛け、数回に渡って突撃し、町の大半を占領した。しかし、台兒莊守備軍は命懸けで抵抗し、彼我双方が接近戦・市街戦・夜戦・白兵戦を展開、互いに交錯して一進一退を繰り返した。3月31日、湯恩伯軍団が台兒莊附近に到着、敵の数方面からの援軍を撃退し、敵を側撃して後方の交通線を遮断した。この時、我軍の他の部隊は外線の西南・東南から台兒莊へ増援し、兵力を集中して敵軍への反包围を進めて包囲作戦を形成、形勢は敵の優勢から我軍の局部的優勢に変化した。4日、守備軍は反撃を開始し、6日、中国軍が全線で反抗を発動、嶧城・棗莊方面へ逃げ隠れた一部の敗残兵を除いて全て殲滅し、7日、台兒莊戦役は終わった。

李宗仁は彼我の長所短所を分析し、我が方の長所で敵の短所を攻める考えを示した。台兒莊戦役でも、これが立派に活用された。装備では敵が優れ我が方が劣り、日本の戦車・大砲・飛行機の威

力はかなり大きかったが、李宗仁が展開した接近戦・市街戦・白兵戦により、敵の優勢な装備はさほど効果をあげられなかった。これが戦役の勝利に極めて重要な役割を果たした。たとえば、3月27日、敵が台兒荘の北門を破り、町の東北部を占領したが、守備軍の将兵は命懸けで町を守る決意で敵と一進一退を繰り返し、接近戦・市街戦・白兵戦を繰り返して、何度も突撃、一軒ごとの争奪戦を行なった。4月2日、敵が町の4分の3を占拠し、形勢が急を告げた時、中国の守備軍は勇敢にも夜襲隊を組織、町の西北部と東北部を一挙に奪回し、多くの感動的な成功例を生み出したのである。

李宗仁は常に「抗戦すればすなわち存し、屈伏すればすなわち亡ぶ」、「自力で侵略に抵抗しよう」「最後の勝利は、必ず我国のもの」などの愛国主義思想を喧伝し、広範な軍民が英雄的に敵を倒し、勝利の信念を固くする上で重要な役割を果たした。たとえば、台兒荘戦役における我軍は強敵に対していても、全将兵はいささかも恐れることはなかった。李宗仁は自ら軍を率いて前線に臨んだが、韓復榘は戦わずして逃亡した。日本軍が済南・泰安を占領して直に徐州へ迫った時、蒋介石は第5戦区長官、李宗仁部隊の安全が気に掛かり、他省へ移るよう勧めたが、李宗仁は個人の安全を顧みず、そのまま徐州に駐屯し、作戦を指揮したのである。張自忠は危機に臨んで命を受け、臨沂救援に馳せ参じ、死を冒して督戦し、板垣師団を戦敗に狼狽させた。第2集団軍の孫連仲は、台兒荘が極めて危険な時、守備していた池峰城師団長に次の命令を下している。「将兵が全て倒れたら、貴殿が後を埋めよ。貴殿が倒れたら、自分が後を埋めよう」。こうした大義厳然たる愛国の精神は人々をつき動かし、広範な将兵はわが身を顧みず、英雄的に戦い、戦場を血に染め、死を誓って後退しようとしなかった。3月16日、日本軍が飛行機・大砲を動員して3000の将兵が必死に守る町

で3日間血戦し、師団長王銘章・参謀長趙渭浜をふくむ全将兵が壮烈にも国に殉じた。また台兒荘を守備する第2集団軍は、半月の決死の戦闘を経て、副師団長康法を含む1万人近い将兵が死傷した例もある。こうした天地を驚かし、鬼神をも泣かしめる壮烈な有様は、広範な将兵の高い愛国主義の精神を充分に表わしているが、これが敵に打ち勝つ最も重要な基本条件の一つである。

李宗仁の抗戦思想が提起した抗戦勝利に最も重要な客観条件とは「民族の自覚と民族内の団結」、「民族救亡の連合戦線」であった。抗戦では必ず「総体的な動員を行い、我が4億の民を全てよく立ち上がらせ、日本侵略者に抵抗す」べきであると強調したのである。こうしたことは、実質的には抗日民族統一戦線の問題である。抗日民族統一戦線の提唱者が中国共産党であったことについては、李宗仁の認識上限界があったが、この統一戦線問題が台兒荘での大勝利の根本的な要因であったことは確かである。李宗仁将軍は台兒荘戦役でこの思想を貫徹したのである。第一に、李宗仁と蒋介石嫡系部隊および東北軍・西北軍・広西軍・四川軍・雲南軍などが隊列を組んで協力し、参戦各部隊による英雄的な共同作戦の局面を形成した。第二に、李宗仁が徐州の前線に赴き、八路軍副司令員彭德懷と会見し、津浦線襲撃に兵を出し、対日作戦に呼応するよう要請した。八路軍の有効な呼応が、台兒荘の大勝利に大きな役割を果たしたのである。第三に、李宗仁の古くからの仲間であった白崇禧も周恩来・葉剣英に徐州作戦の指導方針について助言を請い、両者の積極的な援助を得た。第四に、まさしくこのように「民族救亡の連合戦線」が形成され、広範な人民大衆が勇躍前線を支える熱狂的な情景が出現し、戦役の勝利に重要な貢献となったのである。

李宗仁将軍は「持久抗戦」を強調すると同時に、強引かつやみくもに事を進めることはできず、「敵と一日の長短を争い、一城一池の得失を争う

べきではな」く、ただひたすら「持久抗戦」し、最終的に敵を「全て打ち負かさねばならない」と、人々を覚醒させた。台兒莊戦役の後、4月、日本軍は13箇師団合計30万以上と、各種の重火器と数百機の飛行機とを動員して、6方向から徐州を侵犯した。主要な目的は、徐州付近の国民党軍60万を包囲し、全て殲滅することであった。5月中旬、徐州地区はすでに数倍の敵の大軍に包囲され、優勢な敵との消耗戦、包囲殲滅を避け、我軍の勢力を保持するため、5月18日、李宗仁将軍は撤退を命じ、包囲を突破して移動した。これは戦略上正しく、また極めて必要な措置であった。

総じて、台兒莊戦役の戦略戦術は基本的に正確であり、李宗仁の抗戦思想の具体的活用であった。

3. 台兒莊での大勝利の決定的原因

台兒莊での大勝利には重要な意義があった。それは、日本侵略者の気狂いじみた気炎に打撃を与え、全国軍民が抗戦を堅持する必勝の信念を最大級に鼓舞し、同時に国際的にも重要な影響を与えたのである。その勝利の原因はいったい何か。

(1) 台兒莊戦役における我軍の有利な条件と不利な条件

有利な条件とは、抗日民族統一戦線形成という素晴らしい情勢の下、例えば全国各戦区と中国軍が日本軍を攻撃し、牽制し、国民党の参戦した部隊の愛国仇敵の士気であり、戦区の民衆の後方での支援、情報などの方面での協力、日本軍の思い上りから来る不注意の誤ちなど、数えきれない。

不利な条件とは、第五戦区特有の「大・雑・劣」だといえよう。「大」とは、第五戦区が徐州を中心に北は済南の黄河沿岸、南は浦口南北沿岸にいたる山東・江蘇・安徽および商丘以東の河南の広大な地域を範囲とする、当時最大の戦区であったことである。「雑」とは、戦区が直接指揮する部隊は13個軍29箇師団さらに1個旅団の合計28万

人であっても、管轄下の部隊は多くが「雑軍」であった。「劣」とは、装備や訓練、戦闘力の差が、当時上海で作戦していた部隊と比べれば、「三等ないし四等品」⁽²⁶⁾でしかなかったことである。そして、第五戦区の敵は、北側からは板垣師団と磯谷師団、南側には畑俊六師団^(訳注9)と、中国侵略の日本軍はみな装備は高性能、訓練は普段から行届き、戦闘力が極めて強大な部隊であった。敵の南北からの強い圧力に直面して、我軍の力量はあきらかに不足していた。しかも、1938年1月には、黄河沿岸守備の韓復榘部隊が戦わずに逃亡したため、1月中旬には山東省南部の済寧・沂水・蒙陰・諸城の線まで、敵に順調な進出を許してしまった。そして、我軍の本来の計画であった敵を黄河沿岸および沿海の重要拠点で防ぐという第一期作戦の構想と兗州付近で会戦を準備する第二期作戦の構想とが水泡に帰してしまったのである。同時に、南側からの敵も1月下旬、津浦線南側より進攻を開始、第五戦区は南北から敵の攻撃を受ける厳しく困難な情勢と局面に直面したのである。こうした、有利な条件と不利な条件が存在する下では、戦勝戦敗ともに有り得たのである。「……勝敗がきまるには、さらに主観的努力が加わらなければならない。これが戦争の指導と戦争の実行であ」⁽²⁷⁾と、毛沢東が述べているとおりである。李宗仁の正確な抗戦思想と同時にその思想の指導による正確な戦略と戦術とがなく、主体的な努力を通して不利な条件を有利な条件に転じ、受動的な局面を主動的な局面に変えなかったならば、この戦役の勝利は不可能であった。

(2) 李宗仁が変えた消極的防禦・受動的被打撃の局面

抗戦初期、中日戦争が長期のものであり、中国の戦略方針が持久戦であることについては、国民党と共産党とは一定程度共通認識に達していた。1939年8月7日から12日、蒋介石は南京で第一回

国防会議を招集した。議題の中心は抗戦方針の策定で、明確に次のように宣言した。「敵の最高の戦略は速戦速決であり、我方の最高の戦略は持久戦」即ち「持久消耗戦」である。この方針は彼我の軍事力の実情に適合するばかりか、同時に国民党当局の抗戦への決意を表明するものでもあった。しかし、多くの原因から、当時軍事権の最高統帥者であった蒋介石は実際の作戦ではしばしば消極的防禦の方針を採り、消耗を顧みない受動的被打撃の陣地戦を行った。中国軍が戦場でいかに勇敢に敵を斃しても、国民党軍の対日作戦は失敗の連続で、重大な局面で利を失ったのである。

台兒莊戦役で、李宗仁は自らの抗戦思想と戦略戦術の原則に基づき、蒋介石の消極的防禦被打撃に替えて積極的防禦の方針を採用し、陣地戦・運動戦・遊撃戦が結び付けて敵を深く誘いこみ、優勢な兵力を集中して敵を殲滅する機動的弾力的な作戦を採り、そこから抗戦初期の正面戦場における最初の重要な勝利を得た。台兒莊戦役の発展的勝利から見ると、李宗仁の正確な戦役作戦の方針・原則・計画は、戦役の勝利にとって決定的な意味をもたらしたのである。

(3) 愛国主義の精神を堅持して将兵を激励し、部隊内の団結を堅持。

抗戦初期、第五戦区での作戦に割り当てられた部隊は、主に各地方からのもので、その系統は複雑、装備は立ち後れ、訓練と軍規の面でも劣り、蒋介石中央政府からは一貫してこれらを戦闘能力に欠けた「雑軍」とみなされていた。しかし、李宗仁は民族の敵の前で、地方から派遣された「各部隊の指揮官は、男気に欠けることなく、みな敵侵略者と一戦交える覚悟を持ち、もし的を射た用い方をすれば、全て生きた竜虎の如き精鋭部隊である。それゆえ、私は『雑軍』部隊に終始誠意をもって対した。私は彼らの困難に共感し、その戦闘能力も把握した。作戦が始まると、適材適所の

用兵を行い、その力不足を責めることは絶対にしなかった。平時の待遇と補給については、各部隊は完全に平等であり、ともに国と民とを守る将兵として、第五戦区では上下の隔ては断じてなかった」⁽²⁸⁾。こうした思想のもと、李宗仁は各部隊間の矛盾を解消して懸隔を取り除いたのである。龐炳勳・張治忠および四川軍の鄧錫侯・孫震の諸部隊、これら内戦中に深い宿怨を互いにつのらせた部隊を、李宗仁は自らの配下に置き、愛国主義教育で各部隊は旧怨を捨て、ともに敵に対したのである。李宗仁の呼び掛けと励ましで、参戦した将兵は勇敢に敵と戦い、血みどろの戦場で極めて立派に戦闘任務を完遂したのである。

事実の発展から明らかなように、まさしく李宗仁が愛国主義思想をもって将兵を激励し続けたことで、各部署は団結し、尊重・信頼・団結の姿勢をもって各部隊間の矛盾を解消し、第五戦区所属の部隊を、指揮の統一・団結強固な統一体とし、強大な凝集力と戦闘力を形成し、武器装備と訓練の不足を取り繕うことから始めて、台兒莊戦役での勝利の決定的要因を作り上げたのである。

(4) 厳正なる軍規の強調と軍令の貫徹執行

当然ながら、李宗仁も友誼・配慮・寛容を重んじただけでなく、根本的な是非善悪を前にしては、厳正な軍規と軍令の貫徹執行を強調した。それゆえ、山東省主席であり、李宗仁の副官兼第三集團軍司令であった韓復榘が黄河沿岸の津浦線の陣地を放棄し、部隊を率いて山東西部へ逃亡したことに対して、軍事委員会の命令に従い、今度は泰安地区の作戦に加わるよう勧告した。それを韓復榘が拒絶すると李宗仁はその状況を軍事委員会に報告し、統帥部に厳正な処置を求めた。のちに韓復榘は法に従って処刑されたのである。韓復榘のような軍政の要職にあるものに対して、軍規を犯した後には断固とした処置をする、これは極めて緊要なことであり、抗戦の堅持を保障するには非常

に重要な事である。また、孫連仲部隊が台兒莊を堅持して7割が死傷し、大変な困難に陥っていた時、孫連仲は李宗仁に暫時前線から撤退したいと要請したが、戦役全体を考慮して、その部隊に陣地の堅持を厳命した。その際、「命令に逆い抵抗すれば、軍法により処理する」⁽²⁹⁾と指示し、孫連仲部隊を勝利させたのである。さらに、台兒莊の戦いが重大な時期に差し掛かった時、李宗仁は蒋介石嫡系の湯恩伯軍団に命じて至急前進させた。だが、湯恩伯は勢力温存をはかって南下を肯じなかったため李宗仁は厳命し、「これ以上軍令に背き、戦機を誤らせば、韓復榘の前例に照らし手厳しく処理せん」⁽³⁰⁾と訓戒した。同時に李宗仁は湯恩伯が主力を率いて前進し、30日夜明けまでに目的地に到達するよう蒋介石に命令依頼の電報を打った。こうして、湯恩伯はそれ以上遅れて戦機を過つことなく部隊を南下させ、迅速に敵を背後から攻撃したのである。台兒莊に攻め込んだ日本軍は腹背に敵を受け、我が包囲に落ちた。李宗仁のこうした断固たる措置が、台兒莊戦役での勝利に重要な働きとなったのである。

(5) 李宗仁は終始第一線を堅持し、広範な愛国的将兵と共に戦った。

戦闘の間、戦役を領導する人物が多く、将兵と共に戦い続けられるか否かは、その部隊の戦闘意欲と信念とによって極めて重要である。早くも1938年初、韓復榘が陣地を放棄して逃走して津浦線北部では戸が開け放しになり、守備兵のいない徐州は危機に瀕し、統帥部は第五戦区長官に命じて部隊を帰徳県^(訳注4)・亳県^(訳注5)へ移動させ、戦区の中枢機関を敵の破壊から免れさせようとした。しかし、李宗仁はそのころから彼我の形勢の展開と徐州防衛戦が対日抗戦の全局に及ぼす影響を考慮し、作戦指揮の有利さという条件から、移動しなかった。そして、戦区の最高指揮機関と彼自身を、台兒莊戦役の間、終始戦闘の第一線に留

めたのである。これは、戦役の指揮に有利なばかりか、さらに重要なことには戦闘が最も厳しくかつ最も困難な時に、強固な戦闘の核心と、比べるべくもない激励の力になり、広範な将兵の勝利の信念をいっそう打ち固めたのである。これは、疑いもなく戦役勝利の決定的な一要因である。

毛沢東は、「戦争の勝敗は、もちろん双方の軍事、政治、経済、地理、戦争の性質、国際的援助などの条件によって決まるのであるが、しかし、たんにこれらの条件だけで済むのではない。これらの条件だけでは、まだ勝敗の可能性があるというにすぎず、それ自身としては勝敗はきまってははいない。」⁽³¹⁾と正確な指摘をした。我々が考える台兒莊での大勝の原因は多方面にわたる。しかし、もし李宗仁の正確な抗戦思想がなく、その思想のもとでの正確な戦略と戦術とがなかったならば、この戦役の勝利は不可能であった。李宗仁が台兒莊戦役で発揮した主体的な努力と正確な戦争指揮は、台兒莊での大勝への重要な貢献であり、大勝利の決定的な原因でもあった。

おわりに。抗戦期の偉大な愛国主義者・卓越した軍事家・理論家

李宗仁生誕百年記念式典の席上、全国政治協商会議副主席洪学智は次のように述べた。「李宗仁氏は、軍馬の青春、晩節を全うせり」^(訳注6)⁽³²⁾。これは、李宗仁が一人の愛国主義者であったことの表現であり、抗日期にあっても、偉大な愛国主義者の名に恥じないと考えられよう。

李宗仁と蒋介石との矛盾が、抗戦前すでに互いに引くに引けない状態にあったことは明白である。「九一八」以後、日本の侵略に如何に対するかという問題で、李宗仁は蒋介石を代表とする国民党統治集団の対日妥協と譲歩、「安内攘外」の反動的国策に反対し、断固として抗日救国を主張したのである。1936年、反蒋抗日に始まり逼蒋

抗日に結果した「両広六一運動」^(訳注7)は、李宗仁と西南当局が国家と国民の命脈に関る時に「蹶然として掲げた正義の旗」⁽³³⁾であり、この運動の平和的解決は国内を「内戦停止、一致抗日」の大きな流れに従わせ、共通の敵に心を合わせる団結禦侮の前奏であった。その意義と影響ははかり知れない。毛沢東は当時李宗仁にあてた手紙に「まことに真の救国政策の重要な方法」⁽³⁴⁾と記した。これは李宗仁の愛国主義の具体的な表現である。

“七七”事変勃発後の7月21日、李宗仁は次のように打電した。「委員長を支持して抗戦を主張するに、如何なる犠牲も惜しまざる所有り」⁽³⁵⁾。8月25日、蒋介石が李宗仁を第五戦区司令長官に任ずると訓令するや、李宗仁は即刻広西で兵員を補充して戦いの準備を進め、1か月で40個連隊を組織、続いて3箇軍団を整頓して、主力を徐州前線に派遣した。個人的な恩讐を超え、抗戦の大局を重しとし、愛国主義思想を輝かせたのである。

抗戦の時期、李宗仁は6年の長きにわたり第五戦区司令長官の任にあり、徐州会戦・武漢会戦・随棗会戦^(訳注8)・棗宜会戦^(訳注9)など重要な戦役を指揮したが、それぞれの会戦では自ら前線に赴き、犠牲を恐れず、将兵を指揮して英雄的に戦い、敵軍に重大な打撃を与えたのである。なかでも台兒莊戦役では赫々たる戦功を立て、祖国の領土を守り、英雄的に敵と戦った不朽の功勲を歴史に刻んだのである。

李宗仁の抗戦思想は、多くの面で中国の抗日戦争の客観的発展法則を映す真理のきらめきであり、中国人民の抗日戦争理論における貴重な精神的財産である。李宗仁の抗戦思想は多くの広がりを見せるが、特に抗日戦争がなぜ全民族抗戦であるのか、最後の勝利はなぜ中国のものなのか、また、自力更生によって全民抗戦を進め、亡国論・速勝論に反駁するなどの面においては、毛沢東の論じた持久戦とほぼ同内容となっている。抗戦期にあって、李宗仁の抗戦思想の影響は甚だ広かつ

たが、“焦土抗戦”の四文字がのちに抗戦期に広く引用され、最も悲しむべき抗戦スローガンとなったのである⁽³⁶⁾。しかも、この考えは白崇禧によって「小さな勝利を積み重ねて大勝利とし、空間をもって時間にかえる」の言葉にまとめ直され、国民政府軍事委員会に採用されて全国に伝えられた。そして国民党正面戦場での対日作戦における根本的戦略の指導思想と戦術・戦略の原則の基礎となったのである。これは正面戦場での作戦を指導し、広範な将兵を抗戦の道に動員・組織し、抗日戦争の勝利を勝ち取るのに積極的な意義を持ち、中国の抗日戦争の勝利にとって重要な貢献となったのである。李宗仁は卓越した抗戦の軍事家・理論家の名に恥じない人物であった。

言うまでもなく、李宗仁の抗戦思想もまた限界性があったが、毛沢東が言うように「これは歴史的条件下から説明を加え、理解させるべきであり、先人に厳しすぎる要求をしてはならないのである」⁽³⁷⁾。

【原註】

- (1) 謝剛「論＜中華民国訓政時期約法＞的理論来源」『華東師大学報』1984年第6期
- (2) 李宗仁「我的主張－焦土抗戦」、『焦土抗戦的理論与实践』，全民戦周刊社編，1938年4月，1ページ。
- (3) 『李宗仁回憶録』（下冊），広西人民出版社，1980年11月，683ページ。
- (4) 李宗仁「我的主張－焦土抗戦」、『焦土抗戦的理論与实践』，1ページ。
- (5) 李宗仁「民族復興与焦土抗戦」、『焦土抗戦的理論与实践』，38年4月，6ページ。
- (6) 李宗仁「我的主張－焦土抗戦」、『焦土抗戦的理論与实践』，38年4月，1ページ。
- (7) 李宗仁「焦土抗戦的主張与实践」、『焦土好戦的理論与实践』，31ページ。
- (8) 李宗仁「我的主張－焦土抗戦」、『焦土抗戦的

理論与实践」1ページ。

(9) 李宗仁「民族復興与焦土抗戰」,『焦土抗戰的理論与实践』,12ページ。

(10) 李宗仁「關唯武器論与機會主義」,『焦土抗戰的理論与实践』,48ページ。

(11) 李宗仁「抗戰勝利的必然性」,『李德鄰先生言論集』,15ページ。

(12) 李宗仁「抗戰勝利的必然性」,『李德鄰先生言論集』,15ページ。

(13)(14) 李宗仁「当前我們应有的努力」,広西建設研究会編『李德鄰先生言論集』,1941年7月,15ページ。

(15) 李宗仁「反侵略与持久戰」,同前書23ページ。

(16) 李宗仁「焦土抗戰的主張与实践」,『焦土抗戰的理論与实践』,31ページ。

(17) 『李宗仁回憶錄』(下冊),821ページ。

(18) 李宗仁「我的主張—焦土抗戰」,『焦土抗戰的理論与实践』1ページ。

(19) 李宗仁「民族復興与焦土抗戰」,『焦土抗戰的理論与实践』,6ページ。

(20) 李宗仁「焦土抗戰的主張与实践」,『焦土抗戰的理論与实践』,31ページ。

(21) 李宗仁「民族復興与焦土抗戰」,『焦土抗戰的理論与实践』,21ページ。

(22) 李宗仁「我的主張—焦土抗戰」,『焦土抗戰的理論与实践』,1ページ。

(23) 李宗仁「抗戰勝利的必然性」,『李德鄰先生言論集』7ページ

(24) 李宗仁「我的主張—焦土抗戰」,『焦土抗戰的理論与实践』,1ページ。

(25) 李宗仁「抗戰勝利的必然性」,『李德鄰先生言論集』,7ページ

(26) 『李宗仁回憶錄』(下冊),704ページ。

(27) 『毛沢東著作選読』(上冊),人民出版社,1986年版,229ページ。(訳文は日本語版『毛沢東選集 第2巻』北京 外文出版社 1968年)

(28) 『李宗仁回憶錄』(下冊),795ページ。

(29) 『李宗仁回憶錄』(下冊),732ページ

(30) 『李宗仁回憶錄』(下冊),731ページ。

(31) 『毛沢東著作選読』(上冊),人民出版社,1986年版,229ページ。

(32) 『桂林日報』,1991年8月14日。

(33) 「毛沢東等紅軍將領關於西安事變致国民党政府電」,『西安事變電文選』。

(34) 『毛沢東書信選集』,人民出版社,1983年12月,70ページ。

(35) 『中国全面抗戰大事記』(上),39ページ。

(36) 『李宗仁回憶錄』,681ページ。

(37) 『毛沢東著作選読』(下冊),255ページ。

【訳注】

(訳注1) 1934年4月17日,, 外務省情報部長の天羽英二が定例記者会見の場で述べた主張。「東亜の秩序」に対して日本の単独責任を主張し,列強の中国援助を排撃,中国の親英米派を牽制した。

(訳注2) 本文にあるように韓復榘が銃殺された後,孫桐萱が第三集團軍副司令から昇格した。

(訳注3) この時,畑俊六は中支派遣軍司令官。なお,明治大学の山田朗助教授の御教示によると,畑自身が師団を率いて台兒莊の戦いとその後の徐州作戦に参加したことは日本側に記録はなく(防衛庁防衛研修所戦史室・戦史叢書89 「支那事変陸軍作戦(2)——昭和十四年九月まで——」朝雲新聞社 1976年 69~72ページ),また中支那派遣軍司令官の立場から考えても,それは有り得ない。また,台兒莊の戦いに参加した日本軍は北支那方面軍第2軍第10師団瀨谷支隊と第5師団坂本支隊であり,中支那派遣軍所属の部隊は参加していない(前原透・桑田悦編著『日本の戦争——図解とデータ』原書房 1982年 19ページ)。さらに畑自身の日誌では,上海の中支那派遣軍司令部から5月1日に南京の戦闘司令所へ行き,翌日蚌埠へ向かったが,6日には秩父宮出迎えのため南京に戻り,8日再度蚌埠で指揮をとり,25日に占領後の徐

州に入っている（『続・現代史資料（4）——陸軍畑俊六日誌——』（みすず書房 1983年131～135ページ）。陳氏らは総体的な日本軍の動きから本文のように判断されたようである。

（訳注4）山東省南部。

（訳注5）現，安徽省亳州市。

（訳注6）原文：青春戎馬，晩節黃花。

（訳注7）一般には「両広事変」あるいは「六一事変」と呼ばれる。1936年6月1日，広東の陳済棠と広西の李宗仁・白崇禧が北上抗日を掲げて兵

をあげた事件。蒋介石の強硬な姿勢に，陳済棠は下野し，李宗仁・白崇禧は妥協を余儀なくされた。（訳注8）1939年4月30日から5月7日にかけて，湖北省北西部の随県・棗県で国民政府軍の張自忠・李品仙が，武漢防衛のため随県・棗県に出撃した日本軍を撃退した戦役。

（訳注9）1940年5月初め6月中旬にかけて，日本軍が湖北省棗陽県・襄陽県・宜昌市一帯に出撃し，抗戦した張自忠が戦死するなど中国軍は苦戦を強いられ，結局宜昌が陥落した。

『中国研究月報』への投稿について

1. どなたでも自由に投稿できます。
2. 原稿は，中国及びアジア地域に関する論文，研究ノート，資料，書評などで未発表のものに限ります。
3. 原稿の標準枚数は，400字づめ横書き用紙で論文は50枚，書評は8枚，その他は30枚とします。なお，原稿はなるべくワープロでお願いします。その場合，プリントアウト原稿とフロッピー（MS-DOSのテキストファイル形式でセーブして下さい。それ以外の場合はワープロ機種名を明記して下さい。）をお送り下さい。
4. 原稿には，投稿者の所属および連絡先（住所，電話番号）を付記してください。
5. 採用された原稿は，すべて署名原稿として扱います。
6. 採用された原稿には，当研究所の規定により薄謝を支払います。
7. 掲載された論文などの抜刷を必要とする場合は，実費で作成します。
8. 原稿の送付先，連絡先 〒112 東京都文京区大塚6-22-18

社団法人 中国研究所編集部 TEL 03-3947-8029 FAX 03-3947-8039

本誌の編集方針，企画等に関しては，下記編集委員会が審議しています。

1995年度編集委員会 委員長 並木 頼寿／常務委員：天児 慧，宇野 和夫，大里 浩秋，加々美 光行，
國谷 知史，栗原 純，代田 智明，園田 茂人，
田島 俊雄，田畑 佐和子，丸山 松幸，三好 章，
村田 雄二郎